

インクルーシブ教育を実践するための 心理的安全性が確保された美術室経営

《執筆者》松尾 英治

東京都 大田区立田園調布中学校 副校長



概要

インクルーシブ教育は、学習に困難を抱える生徒や授業に参加できない生徒も含めて、誰一人取り残さない教育である。また教育格差の現実も学校の外で存在している。いかなる環境下でも学校にさえ通えば、誰もが今後の人生が切り開けるような力を持てるようにしなくてはならない。

授業は生徒にとって「心理的安全性」の確保ができるいないと十分に学べないし、何かに気づくこともできない。誰もが学校で学んだこと、考えたことを今後の人生に生かしてほしいのである。そこで本論文の研究テーマを「インクルーシブ教育を実践するための心理的安全性が確保された美術室経営」とした。本論文は、題材の工夫を述べるものではなく、「美術室の空間」、「美術室の人材」について考察し、そのための工夫の視点の提案である。

「美術室の空間」として、美術室内の机、展示パネルなどの配置に関する仕掛けについて述べる。美術室に入ると題材に関連する情報を得られたり、他学年の作品展示を鑑賞することができたりするようにしてある。また作品完成後は簡易的な撮影スタジオで撮影できるようになっている。美術室の配置の工夫を補うのは作業工程に合ったピクトグラムやサイン計画のグラフィックデザインである。

また「美術室の人材」については、学習の補助・心のケアをするメンター系の人材と、探究を支援するクリエイター系の人材、学校図書館司書の実践を報告する。

これらの「美術室の空間」と「美術室の人材」を組み合わせて、美術室を経営する。こうしたら良い美術室になるという提案ではなく、美術室経営において工夫すべき視点の提案となっている。

事例として挙げるのは、インクルーシブ教育を掲げる世田谷区立桜丘中学校での令和5(2023)年度の実践である。

目次

はじめに

1. 美術室経営における空間デザイン
—生徒が気づき主体的に行動したいと思わせる仕掛け—
2. 美術室経営におけるグラフィックデザイン
—主体的に行動したい生徒が混乱しないようにする仕掛け—
3. 美術室経営における人材のポジショニング
—生徒への3つの役割—

おわりに

はじめに

インクルーシブ教育に取り組むについて、「誰一人取り残さない」ことについて考えさせられる。学習に困難を抱える生徒や授業に参加できない生徒も含めて共に学ぶ教育である。確かにそれは正しいのではあるが、それは本質の一部でしかないのではないか。

このほかにも「誰一人取り残さない」ことはないのか。言い換えるなら、小中学校が義務教育の期間ですべきことはどういうことなのかである。実際、学校ではない場所での教育機会には格差がある。幼少期から様々な学習の体験が与えられる恵まれた家庭環境なのか、何も与えられない家庭環境なのかという教育格差の現実は学校の外で存在している。しかし、いかなる環境下でも学校にさえ通えば、誰もが今後的人生が切り開けるような力を持てるようにならなければならない。少なくともその可能性は感じられるように。

だからこそ心理的に安全でないと十分に学べないし、何かに気づくこともできない。今、なぜ「心理的安全性」が確保されなければならないかと問われれば、まさに意義はここにある。誰もが学校で学んだこと、考えたことを今後の人生に生かしてほしいのだ。

では、学校内で最も自己に向かい、学習において何かをつかむ、そのような場所はどこだろうか。その一つは美術室であろう。そこで本論文の研究テーマを「インクルーシブ教育を実践するための心理的安全性が確保された美術室経営」とした。

中学美術の授業改善における工夫として挙げられるのはまず題材である。しかし、その題材がどのような美術室の空間で実施されるのか、また美術室には教員をはじめどんな人材が必要なのかについては、指導案や論文、報告書でも述べられることは少ない。

本論文は、美術室の環境づくりを中心とした経営的視点で論じるため、何か特別な題材に絞った考察ではない。本論文では「美術室の空間」と「美術室の人材」について考察したいのである。

これは美術科の教員だからこそ、実践できる経営戦略である。誰もが安心できる場所である「心理的安全性」が確保された美術室とは、生徒が誰も問題を起こさず、一年を通してスムーズに授業を行って評価をつけることだけを目的としている。誰一人取り残さず、今この瞬間に生み出される表現や、鑑賞で感じたことを大切にしてもらえるような美術室であ

る。そのマネジメントができるのが美術を専門とする美術科の教員なのだ。

以下、「美術室の空間」「美術室の人材」と考察を進めていくが、こうしたら良い美術室になると提案したいのではない。美術室経営には工夫すべき視点があるということを提案したいのである。そして、それぞれの中学校の美術室において、生徒の実態に応じて美術の教員が工夫するための一助としたいのである。

1. 美術室経営における空間デザイン

一生徒が気づき主体的に行動したいと思わせる仕掛けー

令和5年度 世田谷区立桜丘中学校の事例

1-1 美術室のレイアウト

(対話する時間と一人で集中する時間)

美術室の空間は生徒が教室から離れて、美術作品の表現や鑑賞を通して、自分としての意味や価値を見つける場所である。アイデアを練って表現し、鑑賞する。またその鑑賞が、新しいアイデアを生む。当然のことながら、美術室という場所での活動は、教室と同じようなものではない。明確なコンセプトを持って、美術室の空間をデザインしたい。

事例として挙げるのは、令和5年度の世田谷区立桜丘中学校の美術室である。生徒が向かう合うグループのレイアウトにせず、図1のように前向きで個別での作業を優先している。授業の展開で、「アイデアスケッチや作品制作の途中段階での相互鑑賞として対話する時間」と「一人で集中して表現する時間」を設定しているため、基本のレイアウトはこの個別での作業のレイアウトとなっている。



図1 個別での作業を優先したレイアウト
(相互鑑賞は時間を区切って自由に移動)



図2 美術室 前方ドア 図書資料



図3 美術室 窓側 美術館企画展チラシ



図4 美術室 後方ドア 美術館企画展チラシ（配布用）



図5 美術室 後方 NIE スポット

1-2 表現のために（視覚的に関連する情報をブラウジング）

さて、生徒が美術室に入るところから、空間デザインを見ていきたい。美術室に入れば、最新の美術の情報が得られ、学習の意欲が高まるような空間とした。図2は美術室の前方ドアを入ってすぐにある学校図書館の資料である。これは各学年の題材に関連している図書資料である。授業が始まる前など、生徒が手に取って読んでいる。学校図書館の「学習・情報センター」としての役割を美術室にも拡大させたものである。図3の右側面の窓側に展示してあるのは、美術館の企画展のチラシである。前後どちらのドアから美術室に入つても、窓側一面に吊るしてあるものを見ることができる。また図4の後方ドアには、展示してあるチラシの一部を持ち帰られるように並べている。図5は「NIE (Newspaper in Education) スポット」と称して、美術室後に新聞を読めるスペースも設置した。生徒はタブレットで検索することもできるが、情報源としての新聞の活用を模索したものである。

1-3 鑑賞のために

（19クラス分を展示し、鑑賞と表現が入り混じる新鮮な空間）

令和5年度は1年生6クラス、2年生7クラス、3年生6クラスであった¹。作品として表現した後は、展示してそれを鑑賞するまでが一連の授業である。19クラス分を展示するにあたり、美術室側面左側に展示パネルや立体の展示スペースを設けており、2年生の抽象絵画²（図6）、3年生の建築模型³（図7）を展示している。美術室後方にも作品を展示できるのだが、これだけではすべての作品を展示しきれないため、廊下に平面作品を展示している。図8は1年生の情景画⁴である。図9は美術部の作品展示である。校内作品展などの学校公開期間に限らず、作品が完成したら常に展示した。生徒は、自分のクラス以外の作品や他学年の作品を鑑賞し、友人の表現に驚いたり、自分ならこうすると思いを巡らせたりしている。

多様な表現を鑑賞する機会が増えていることで、こういう表現もしていいのだと気づく姿が見られた。自分の表現はこれでいいのかと不安に陥ったり、作品を自ら過小評価したりすることを避けることができる。



図6 美術室 展示パネル（抽象絵画）



図7 美術室 展示台（建築模型）

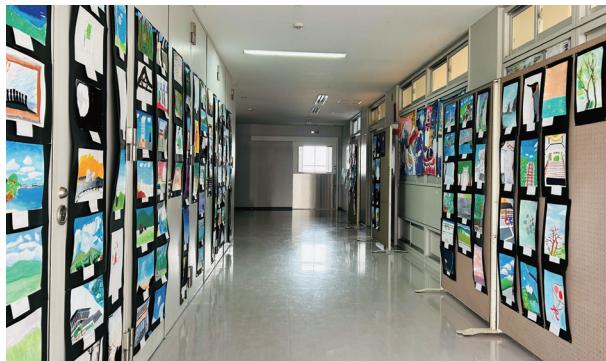


図8 美術室前 廊下（情景画）



図9 美術室 展示パネル（美術部の作品）

1-4 振り返りのために（美術室内の小さな撮影スタジオ）

ワークシートは授業の展開に沿った内容の記述なので、従来のプリントでも良いのだが、タブレットを活用したワークシートにすると、表現や鑑賞の活動を振り返る際、撮影した作品の写真を貼り付けて、どこをどのように工夫したのか、どう感じたのかなど記録しやすい。

タブレットのカメラ機能で、平面作品については自席で容易に撮影できる。立体作品も自席でも撮影できるが、美術室にスタジオがあれば立体作品が撮影しやすいと考え、簡易的であるが図10のようにスタジオをつくった。これはキャスター付きの乾燥棚に照明を取り付けたものと、同じく乾燥棚にロール画用紙をマグネットでつけたものだ。生徒は最も工夫したところ、最も魅力が伝わるアングルを調整して、立体作品を撮影していた。このアングルの違いによって、作品の表現の意図がより伝わってくることもある。

題材を生徒の実態に応じて教員が設定しているように、美術室の空間も生徒の実態に応じて教員が工夫し、主体的に行動したいと思わせる仕掛けとすることで、「心理的安全性」を確保しようとするものである。

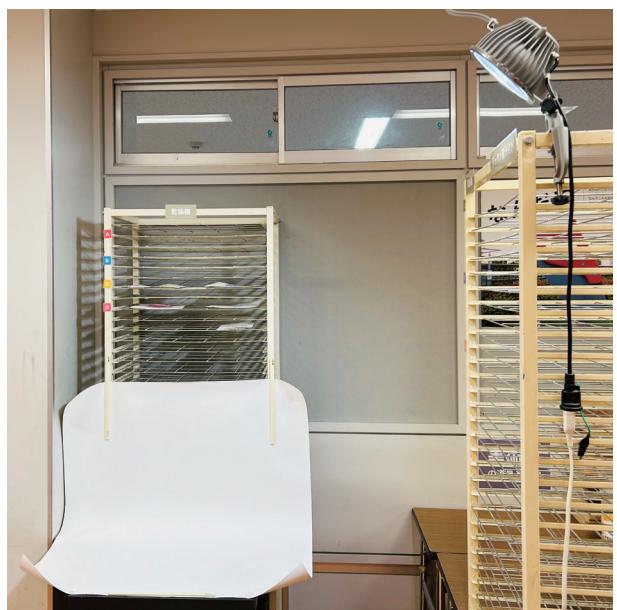


図10 乾燥棚を利用した簡易的な撮影スタジオ



図 11 ピクトグラム 筆洗バケツの片づけ方



図 12 ピクトグラム パレットの洗い方



図 13 ピクトグラム 雜巾の干し方



図 14 ピクトグラム ゴミの分別



図 15 ピクトグラム 作品の保管（部品の状態）



図 16 ピクトグラム 作品の保管（立体の状態）

2. 美術室経営におけるグラフィックデザイン —主体的に行動したい生徒が混乱しないようにする仕掛け—

2-1 生徒の活動のために（ピクトグラム）

教員へ多くの質問が飛び交う、そんな場面は積極的で良さそうに見えるが、同じ質問となると、教員の授業内での指示が浸透していないということになる。新しい題材へ取り組み、その材料へ関心や、関連した他の作品などについて質問することはあるだろう。しかし、筆洗バケツはどうやって片付ける、燃えないゴミはどこに捨てる、作品の保管の仕方など、それ以外の普段の美術室の決めごとについては、美術室を使用する生徒全員が理解しておきたい。そのため、視覚的にわかるピクトグラムやサインを用意した。

生徒が授業中に活動することについては、イラストをつけてピクトグラムとした。普段の制作によく関わるピクトグラムは、注意喚起としてマゼンタ系を基調とした。絵の具の扱いに関するピクトグラムは、筆洗バケツを重ねて片付ける指示（図11）、パレットを備え付けの古い筆での洗う指示（図12）、雑巾を洗ってから干す指示（図13）である。



図 17 サイン クラス名（制作中はコンテナに）



図 18 サイン クラス名（展示台へ移動）



図 19 サイン 題材名（制作中は板書として）



図 20 サイン 題材名（展示中はキャプションとして）

ゴミの分別については図 14 のように、実際のゴミ箱の色に合わせてピクトグラムを制作した。

作品の保管では、平面作品は乾燥棚に入れて授業が終了することが多いので、これは迷わない。しかし、立体に関しては題材ごとに大きく変わってくる。例えば、スチレンボードを材料とした建築模型ならば、ボードの状態、切った部品の状態でそれぞれコンテナを分け（図 15）、そして建築のように立体の状態になってきたら展示しながら保管していく（図 16）。コンテナに合わせてサイン系を基調にし、この3つの状態のイラストを入れたピクトグラムとなっている。どのように動けば良いのか生徒が理解しやすいようにピクトグラムを制作しておくことで、安心して題材に取り組めるようになる。

2-2 作品の保管・展示のために（サイン）

作品の保管や展示については、作品がすでにその場所に置かれているため、イラストがないサインで伝わる。ミニチュアチエア⁵の題材では、図 17 のようにクラスごとにコンテナに分け保管しているが、桜丘中学校のクラスに割り振られ



図 21 サイン 題材名
(制作や展示を行っていない時は年間指導計画表として)

た色を基調としたサインとなっている。図 18 も同様に完成後、展示している状態である。

題材名もサインとして活用できる。図 19 は授業で制作している段階のもので、黒板にマグネットで貼りつけている。図 20 はその題材を展示している段階で、展示場所に貼り付ける。また使わない時は、図 21 のように並べて貼っておくと、サインだけで学年ごとに簡単な年間指導計画表のようになり、次にどんな題材に取り組むのか、生徒にわかるようにすることもできる。

このピクトグラムとサイン計画は、図22のようにデザインの意図を教員が作成した規定集にまとめている。これは美術部の時間に取り扱ったものだが、他にもデザインの授業において導入で活用することもできるだろう。ここで重要なことは「1. 美術室経営における空間デザイン」で述べたことと同じく、題材設定を生徒の実態に応じて教員が行っているように、美術室のピクトグラムとサイン計画も生徒の実態に応じて教員がデザインに携わる点にある。

美術室の空間デザインが、「生徒が気づき主体的に行動したいと思わせる仕掛け」であり、それを補うピクトグラムとサインのデザインによって、「主体的に行動したい生徒が混乱しないようにする仕掛け」とすることで、さらに「心理的安全性」を確保できると考えるのである。

3. 美術室経営における人材のポジショニング 一生徒への3つの役割

現状では教員が一人で授業のすべてを担っていることが多いだろう。ここでは授業において教員のすべきことの意図を明確化することで、状況に応じた人材による支援の可能性を考察し、「インクルーシブ教育を実践するための心理的安全性が確保された美術室経営」への取り組みを探るものである。

どのようなニーズがある時に、どのように対応すべきなのか、美術の授業において考えられる人材のポジショニングを図23のようにまとめてみた。縦軸は美術の専門性、横軸は生徒と関わる時間である。

3-1 3つの役割の考察

① 授業の進行管理

教員は授業の進行を管理している。生徒に表現や鑑賞の活動に取り組ませ、特に表現においては主題を生成させることは大きな役割である。また一連の活動を評価していくことで求められている。

美術室のピクトグラムとサイン計画

使う場所の特性やイメージからピクトグラムや文字情報・色彩の計画を考えました。

1 注意喚起はマゼンタ系の背景を使用

C 0% M 95% Y 40% K 45%

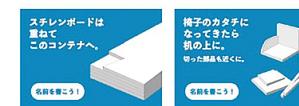
それぞれのピクトグラムで詳しく使い方を伝える。



2 保管場所はコンテナの色を使用

C 85% M 30% Y 0% K 0%

作品の進行に合わせたピクトグラムを掲示する。



3 題材名は題材のイメージでデザイン

題材ごとにフォント・背景色を変え、新鮮さを演出。



4 美術科からの情報は、モノクロームウォームを使用

C 45% M 35% Y 60% K 0%

どの色にも合うコンセプトで演出。



5 桜丘中学校からの情報は、桜の花びらのデザインを使用

C 10% M 85% Y 50% K 0%

桜丘中らしさを表す、桜の花びらで演出。



6 外部からの情報は黒板の色を使用

C 80% M 55% Y 80% K 5%

アートの本、チラシは親しみやすいフォントを使用。



7 クラスカラーを作品保管に使用

3Aの作品 3Bの作品

3Cの作品 3Dの作品 3Eの作品

3Fの作品 3Gの作品

8 美術部の作品保管や道具保管に使用

C 60% M 70% Y 50% K 25%



図22 美術室のピクトグラムとサイン計画（デザインのコンセプトも記載）

この授業の進行管理は、美術の専門性が最も高く、生徒に関わる時間も最も長い。

② 学習の補助・心のケア

メンター系人材の支援である。学習に困難を抱える生徒に、困難を取り除くため、今どのような授業を行っているか、授業の内容をゆっくりと寄り添って説明したり、取り組み続けられるよう励ましたりする。このメンター系人材の支援は、あらかじめ教員の方から授業の内容を共有しておき、用具の取り扱いも含めて題材についての共通理解を図っておく必要がある。

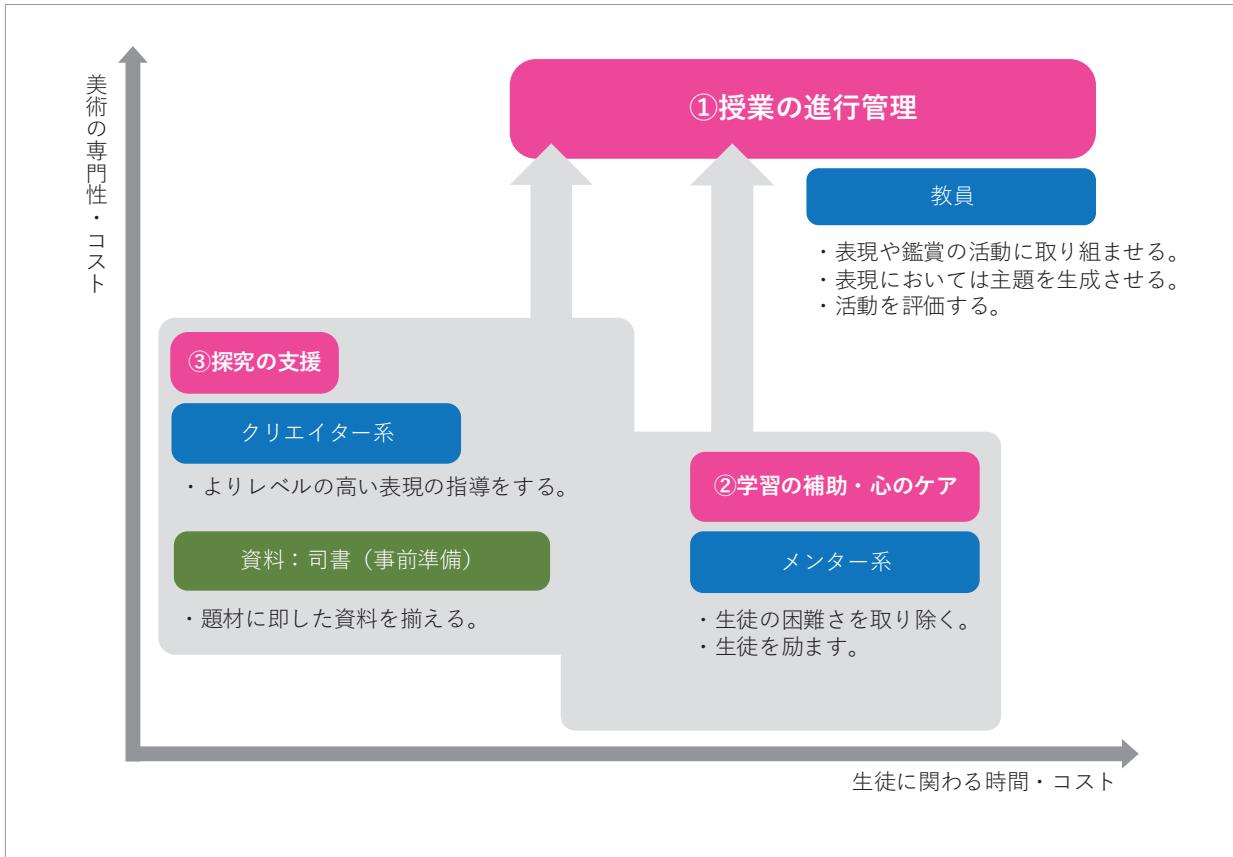


図23 美術室における人材のポジショニング

学習の補助・心のケアは、授業内の時間で常に関わっているので、困難を抱える生徒も題材に取り組むことができる。

③ 探究の支援

授業においては、より深く学ぶことにつながる支援が必要な生徒への対応が生じることもある。つまり、より高いレベルでの表現などに取り組もうとする生徒である。

探究の支援については、2つに分けて考えたい。「事前の準備」と「授業内での対応」である。

〈事前の準備 図書資料の充実〉

学校図書館の司書の支援である。題材ごとに関連する図書資料を美術室に並べる。司書は、アイデアスケッチに役に立つような関連した資料から、学習後にさらに関心を維持できるような内容の資料まで幅広く集める。そのために題材のねらいを説明することは重要である。資料がない場合は図書予算内で購入してもらう。こうして授業に関連する資料を増やしていくことを数年繰り返すと、充実した資料が揃うことになる。

実際に、題材と関連する資料を並べておくと、授業前などに手に取る生徒は多い。

探究の支援のうち、司書の支援は題材を理解しながら選書するため、授業のねらいなどの共通理解は必要である。事前の準備であるため、授業内では生徒と関わる時間はない。

〈授業内での対応 よりレベルの高い表現を支援する〉

クリエイター系人材の支援である。生徒が自らタブレットを用い、ネットで調べて、試しながら試行錯誤している様子も見られるものの、直接、技能的な指導も行いたいところである。しかし、このようなクリエイター系の人材確保が難しく、実際には教員が行うことになるか、メンター系人材が兼ねることになるので、あまり多くの時間を費やすことができない。したがって、このような生徒の対応も見込まれる場合には、探究の支援として、図書資料などをあらかじめ意識的に多く補っておくことや、技能的な情報を掲示しておくことなど、事前に調整し準備しておきたい。

探究の支援のうち、技能的な指導は専門性が高いが、それ

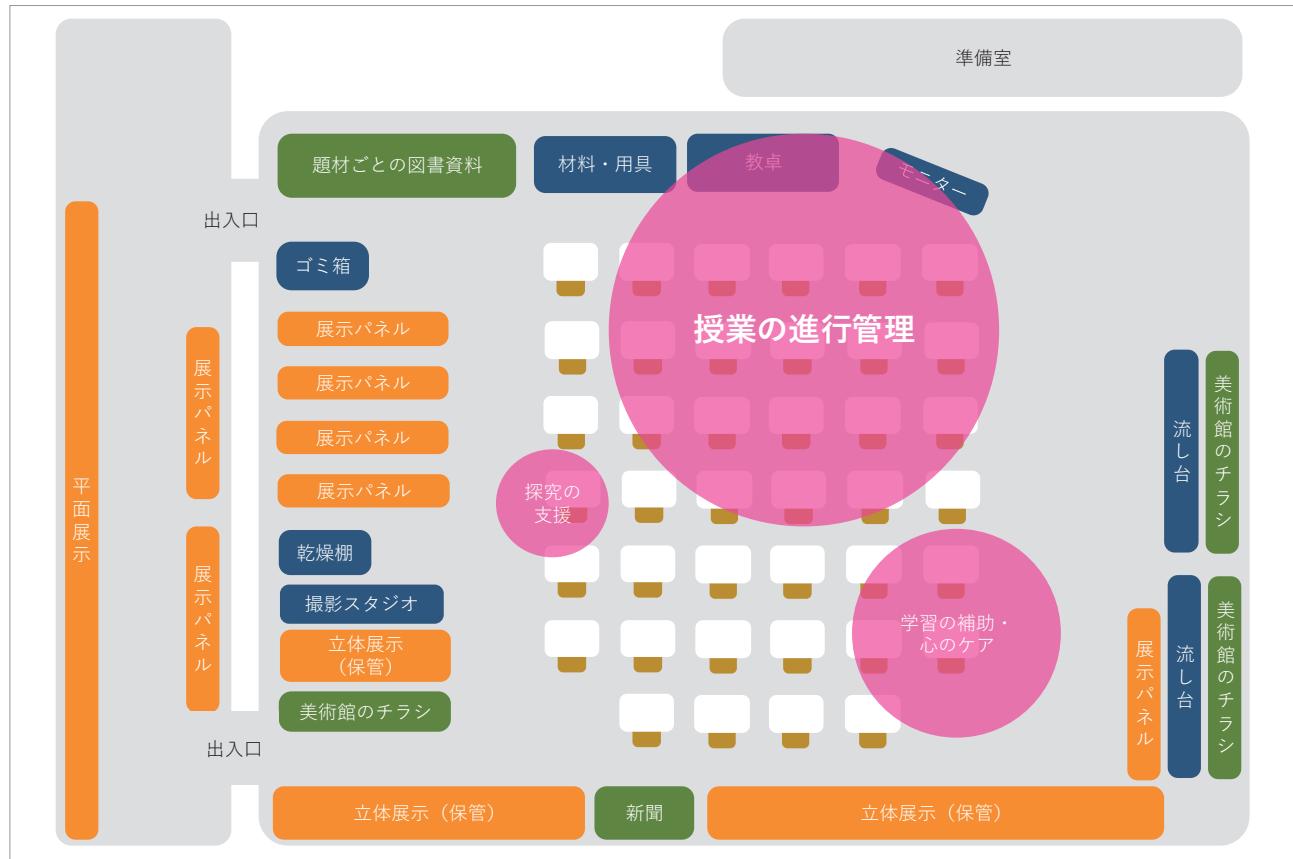


図 24 美術室に支援のニーズを重ねたイメージ

を必要とする生徒は、割合としては少ないので関わる時間は短い。

ここまで人材によるポジショニングを述べてきた。このような役割があるのだと認識することで、題材やクラスの実態に応じて、人材の支援を計画しやすくなる。また、人材がいなくても、教員が授業内でそれぞれの意図をもった行動をすることに置き換えられる。

図 24 は美術室にそれぞれの支援のニーズを重ねてみたイメージ図だ。「① 授業の進行管理」は、最も授業内で割合が大きなものである。インクルーシブ教育においては、「② 学習の補助・心のケア」は、それに次ぐニーズがあるだろう。「③ 探究の支援」はこの中では最も機会が少ないと想定する。

美術室経営の「空間デザインとグラフィックデザイン」の上に、「人材のポジショニング」を組み合わせて、「インクルーシブ教育を実践するための心理的安全性が確保された美術室経営」を意識して成立させるイメージである。ここにそれぞれの題材が効果的に関連すると考えられるのである。

3-2 3つの役割の実践

令和5年度 世田谷区立桜丘中学校の事例

「②学習の補助・心のケア」

学校生活センター 兼 部活動支援員（メンター系） 専門分野：福祉

美術の授業には学校生活センター⁶がつき、学習に困難を抱える生徒へ、以下のような補助を行った。

- ワークシートのどこ部分を行っているのかを示して説明する。
- 用具を準備し、作品に取り組むことを補助する。
- 生徒と対話しながら励まし続け、作品づくりに最後まで寄り添う。
- 生徒を孤立させず他の生徒が話しかけやすい雰囲気をつくる。
- 用具の片付け、作品の保管を補助する。

また、学校生活センターが、放課後に部活動支援員も兼ねており、美術部の生徒は部活動で制作している作品について、その工夫点や見てほしいところなどを細かく話したり、



図 25 「美術室の本棚」(編集について)

作品とは関係のない普段の生活の話をしたりして、美術部の時間を楽しそうに過ごす場面が多かった。美術室がカウンセリングルームや校内別室のような役割を担うこともある事例となっていた。

「③探究の支援」

部活動支援員（クリエイター系） 専門分野：美術

専門性の高い部活動支援員は、ポスターコンクールに向けての指導など行っており、このような指導を求める生徒もいる。また専門性を生かして、美術室のピクトグラム・サイン計画の実現に向けて、生徒に実演ながらデザインを進めていった。前述の図22はそのようにして制作されたものである。

編集者とブックデザイナー

部活動では専門性の高いイベントを行った。「美術室の本棚」という企画で、編集者とデザイナーによる講演である。図25は編集について、図26はデザインについて語っている。このイベントは美術部以外の生徒や保護者も集まって、これまでに3回行われている。

桜丘中学校の事例は、美術の授業では「②学習の補助・心のケア」と「③探究の支援」のうち司書の資料による専門性を高める環境づくりができた。また、「③探究の支援」のうちクリエイター系の専門性を高める支援は、美術部の活動に留まったが、今後の公教育におけるコミュニティ・スクール化に向けて、参考になる事例となった。今後、さらにコミュニティ・スクール化が進み、地域の人材と協力して学校を経営となる時代となるが、地域の人材に協力をしてもらうため



図 26 「美術室の本棚」(デザインについて)

にも、生徒のどのような力を伸ばしたいのかというねらいを明確にし、それを共有していくことは重要である。

おわりに

美術室経営について、「空間デザイン」と「グラフィックデザイン」、「人材のポジショニング」について考察してきた。「インクルーシブ教育を実践するための心理的安全性が確保された美術室経営」で、いかなる教育格差があろうとも、中学校を卒業する誰もが後の人生で生かせるような何かを掴むことを願いつつ、本論文はそのための工夫の視点の提案をした。美術の教員がそれぞれの美術室において、生徒の実態に応じて経営を続けてほしい。

インクルーシブ教育の実践は今まさに起きていることへの対応であるが、我々美術の教員が本当に見つめなければならないのは、生徒の現状だけでなく、生徒の未来である。

(まつお・えいじ)

【注】

- 筆者は2、3学年の全クラスと1学年の全クラスの0.3時間を持たせた。全学年19クラスの授業の年間指導計画、評価（1学年は一部の評価）は筆者が担当した。
- “心のイメージを形に”，『美術2・3上』，日本文教出版，2021年
- “人が生きる社会と未来”，『美術2・3下』，日本文教出版，2021年
- “なぜか気になる風景”，『美術1』，日本文教出版，2021年
- “暮らしやすさのデザイン”，『美術2・3上』，日本文教出版，2021年
- 世田谷区の学習環境向上を目指す施策の一つで、学校生活サポーターとして、区立小・中学校に在籍している特別な配慮や支援が必要な児童・生徒に対して、学習の補助や学校生活の見守りなどを行っている。桜丘中学校では授業を受ける生徒の補助のほか、校内別室での生徒の活動に接することも多い。